

令和 8 年度 第 1 回恵庭市アイヌ施策推進委員会 議事録

場 所：恵庭市郷土資料館 研修室

日 時：令和 8 年 6 月 8 日（月）15 時 30 分～16 時 30 分

出席者：

（委 員）内田委員長、白幡副委員長、藤原委員、島瀬委員、阿部委員（村中委員代理）

（事務局）教育部 岩渕教育長、山口部長、黒氏次長

郷土資料館 高野館長、長町主査、重松学芸員

■開会

<事務局 高野館長> 議題までの議事進行・会議成立の報告

<岩渕教育長> 開会の挨拶

<委員・事務局> 自己紹介

<事務局 高野館長> 内田委員長に議事進行交代

■議題

(1) 恵庭市アイヌ施策推進地域計画

<事務局>

会議資料 2～6 ページを説明。

(2) 令和8年度アイヌ政策推進交付金事業

①アイヌ政策推進交付金事業計画

②令和8年度事業

③アイヌ文化保存・継承環境整備事業

④アイヌ文化マスター育成事業

⑤アイヌ文化学習見学会事業

⑥ムックリ製作体験事業

<事務局>

会議資料 7～16 ページを説明。

<A 委員>

アイヌ文化学習見学会事業は今年は新ひだか町に行くのか。

<事務局>

見学に行く。

<A 委員>

新ひだか町アイヌ文化交流センターは新ひだか町アイヌ民俗資料館のことか。

<事務局>

シャクシャイン記念館の横に新ひだか町アイヌ文化交流センターが出来た。

<A 委員>

シャクシャイン記念館の横に資料館があるが、そこではないのか

<事務局>

ひとまとめで新ひだか町アイヌ文化交流センターと呼んでいるのかもしれない。平成 28 年の遺跡見学会で訪れており、参加者からも好評。去年も子供たちとアイヌ文化マスター育成事業で訪れている。

新ひだか町が今年度からアイヌ文化マスター育成事業と似た事業を行うことから交流を行おうという話が出ている。アイヌ文化学習見学会事業とアイヌ文化マスター育成事業の中身については現在調整中である。

<A 委員>

新ひだか町の資料館辺りを見るものが多いからいいと思う。シャクシャイン記念館の横に資料館がある。小さい資料館だが面白い資料がある。チャシもあるが、そのチャシはシャクシャインの蜂起の戦いに使われたものと分かっている。実際に使ったチャシだと分かっているため面白いと思う。狼の頭骨を送ったもの（カムイノミ）、たぶん日本で1個か2個しかない。送った状態になっているものはあまりないのでぜひ見られたら良いと思う。

(3) アイヌ文化マスター育成事業の参加者選考

①令和8年度参加者の選考

非公開

②令和9年度参加者の選考方法

<事務局>

会議資料20～26ページを説明。

<A 委員>

特にジャンボタクシーとバスの運行についてだが、場合によっては委託する業者名や経路などをどこかに記載する必要があるのか。

<事務局>

今回応募された方の中に「どの企業がどのように関わっているのか開示してほしい」という意見があった。そのため子どもたちに配る次回案内の用紙に、委託する企業名やジャンボタクシーとバスの会社名を記載したいと思う。

<A 委員>

記載したほうが安心するので良いと思う。令和9年度の募集要項の大きな変更点は、「作文について」と「応募方法」の他、赤字記載の箇所になる。作文の文字数は400字くらいで漠然としているのではなく指示をしたほうが良い。原稿用紙はそれぞれ市販のものを使用しているのか。

<事務局>

各自、それぞれ用意した原稿用紙で提出している。

<B 委員>

字数だが全体で400～800字程度の指示の仕方どうか。おそらくここで300字、100字と書くとそれぞれを300字以内、100字以内で書くので実質300字くらいで終わってしまう。そのため、書いてほしい項目とそれ以外に自由に書いて良いとして、全体を合わせて400字～800字はどうか。応募資格が小学生から高校生までのため、字数に幅を持たせたい。多くかけない子は400字程度で良いし、語りたいことがたくさんある人は原稿用紙2枚分くらいまで書いてくると思う。400字ですべて書いてもらおうと、小学生くらいだと頑張っ書いたと思うが、それ以上となると甲乙をつけるのがすごく難しくなる。

<A 委員>

今回、小学生～高校生まで幅が広いためなかなか点数をつけるのが難しい。

<B 委員>

参加者と不参加者を分けるのは楽だが、中間の人の濃淡がすごく難しいため、作文を書ける人には書いてもらったほうが伝わりやすいと思う。今回、アイヌ文化に関する言及が少ない。自分のアピールをしたいのはわかるが、アイヌ文化マスター育成事業に応募した理由は何かが見えにくい。

<A 委員>

作文についてだが、少し幅を持たせて原稿用紙1～2枚程度とすると高校生ならば2枚程度書けるだろうが、小学生には難しいと思われる。

<事務局>

今の意見をまとめると、アイヌ文化マスター育成事業募集要項の「10 作文について」の(3)について合わせて全体で400～800字とすると、真面目な子ほどそれに囚われてしまう。(3)の「300字くらい」や「100字くらい」は抜いても良いか。

<B 委員>

それは抜いて良いと思う。例えばこの2つの視点とそのほかにも書いて良いとして、全体で400～800字程度というのはどうか。

<A 委員>

良いと思う。

<C 委員>

ほかのアイヌ協会の事業は主に大人を対象にしているようで、小学生・中学生・高校生に目を向けているものはあまりないようである。昔からスーパーやコンビニがあった訳では

ないため、昔のアイヌの人の生活を学びながら、生きた勉強をしていくのが良いのではない
か。より良い事業にしていきたいため忌憚のない意見を聞きたい。

<事務局>

今回のアイヌ文化マスター育成事業では複数回受けている子も受かっている。このよう
な事業を行う場合、通常は初回の子たちを優遇するように行政は考えがちだが、これに関し
て言えばそういったことはあまり考えられていないと思った。そもそもこの事業をやる目
的から行くと初回の人を優遇するのか、初回複数回関係なく作文等で決めるのかどちらが
良いのか。アイヌ文化のマスターを作るのか、広くいろんな子供たちにアイヌ民族がいるこ
とを広めるのかどちらがよいのか皆様の考えを知りたい。

<A 委員>

いかがか。

<B 委員>

同じ質問を私がアイヌ施策推進委員会に入った時に聞いている。広めたいのと深く考え
てくれる子を増やしたい、両方を叶えたいと聞いた。そのため私は初回の人はもちろん入れ
るが複数回の人であっても意欲があり、さらにこれからのアイヌ文化を担ってもらいたい
という思いも乗せても良いと理解して選んでいる。

<A 委員>

同意する。今のアイヌ文化の現状だがアイヌ文化の専門家や人材が少ない。しかし、若者
たちの中にはアイヌ語やアイヌ文化を学んでいる子たちは少しずつ増えている。アイヌ文
化マスター育成事業のような事業を行っているところはなかなかないため、一つは広く浅
く広めるという面がある。人材育成という面で見ると、高校大学に向かっていくにあたって
アイヌ文化の世界に関わってくれる子が出てくると良いと思っている。言語学の世界では
人は少ないけれどいるが、文化人類学にはあまりいないという状況のためうまく育てく
れると良いと思う。参加者 6 名の比率が今回のように初回の人と複数回の人で半分くらい
になれば良いと思う。

<C 委員>

行先によって申し込みをする人数は変わると思う。行先についての感想などを書いても
らい、アイヌ施策推進委員会の 5 人の評価で参加者 6 名を決めるのが良いと思っている。
初回の人を中心にしたいがそれでアイヌ文化が広まるかどうかを懸念している。それなら
ば何回も応募している、本当に意欲的な人を見極めて事業を行うのが良いと思う。参加回数
にこだわらずどういう意見や考えを持っているのかを知りたい。大人は頭が固くて難しい
が高校生や中学生、小学生のうちにアイヌ民族について知っていることをとにかく広げて
いきたいというのが根底にある。初回の人や回数で決めるのではなく、作文を読んで決めたい
と思っている。初回の人だけだと阿寒に行きたいから応募したなどその場限りだけにな
ってしまいそうでいろいろ考えた結果が今回の結果になった。

<B 委員>

アイヌ文化への興味と広い周知をするのはカリンバまつりのムックリづくりが受け皿になっているのではないか。名前が「アイヌ文化マスター育成」となっているため、C 委員などの話を聞いて、新しい人にも応募してほしいが 1 回 2 回で分からないところを繰り返し複数の箇所を見学することで、しっかりと理解を深めてくれる人がいるのではないか。言語学や文化人類学の話が出たが、自然人類学にいたっては手を付けたくない人が居たり、私の周りでも人骨を扱っていることを話すなるべくそういう話はしないでくれと言われ、周りに理解されない。本当に深く研究する人になってくれるような人をここで育てたことは意味深いことになると思う。誤解や偏見がなくなっていくことに少しでもより深く関わってくれる人を育てられるのであればすごく意味のある事業だと理解して選考に関わっている。

<C 委員>

アイヌ民族の文化を通して日本の文化、北海道の文化、恵庭の文化を知るきっかけになれば良いと思い、恵庭の文化の講座もアイヌ文化マスター育成事業の中で行っている。恵庭以外に行ってもじゃあ恵庭はどうか勉強してみようという会話をしている。郷土愛に目覚めてほしいという考えもある。

<A 委員>

最初に比べると応募人数が増えていて、落ちた人に申し訳ないと思う。このような事業自体がありがたいことだと思っている。この事業に関わり始めたときに話したが、この事業に限らず子どもたちを海外に行かせたほうが良いと考えている。実際に前に居た市でアイヌ関係の子どもたちとカナダなどの先住民族との交流を何年間か行っていた。子どもたちは自信を持って変わって帰ってくる。先住民族に限らず、子供たちが広い世界を見るのは重要なことだと思っている。ただ、今は経済的に難しい。

来年度の募集要項の作文については、原稿用紙 1, 2 枚(400 字～800 字程度)にし、中身は 2 つくらいのテーマを持たせてあとは自由に書くという感じでよろしいか。来年度の参加者人数は同じ 6 名程度の想定か。

<事務局>

6 名程度の想定だが、応募の人数が読めないところもあるため検討していく。

<A 委員>

高校生くらいで複数回参加している人はスタッフ側でも良いと思う。

<事務局>

先ほど聞いたが令和 3 年からの事業でまだ 5 回か 6 回でこういう悩みが出てきた。継続的に議論する機会には必要。今回はまだ初回の人で参加の人も、数回受けていても不参加の人もいたので良いが、参加決定者全員が複数回参加の人だと初回応募の人からすると不利だと思われることもある。

<A 委員>

そこは考慮して選考を行う。

<事務局>

一人だけはリーダー枠で募集するとレベルの違う選考が出来る等、いろいろな工夫の仕方が引き続き必要だと思う。KPI 策定が3年くらいのためあまり変えられないので、地域計画を変えるときにがらりと変えるなど考える必要がある。

(4) その他

<事務局>

次回の委員会の日程について説明。

■閉会